

高橋蘭齋

寛政11年(1799年) - 明治15年(1882年)

高橋蘭齋は江戸時代の渋川村裏宿で、農業と馬問屋を営む高橋茂右衛門の次男として生まれました。幼名は角蔵、後に健治または健次郎。諱は勇魚。通称は茂右衛門。蘭齋・可度は号です。今日では渋川郷学の学統をつなぐ一人として位置づけられています。

蘭齋は、読み書きから和漢の史書を南横町(現・南町)の木暮足翁に、漢詩を遍照寺(並木町)住職の周休竹溪に学び、後に和歌と国学を一時期渋川に滞在していた近江(滋賀県)出身の和歌の大家・大寂庵立綱に学びました。

蘭齋は20代のうちに父・茂右衛門を亡くし、若くして家督を継ぎ茂右衛門を襲名しました。祖父・義右衛門、父・茂右衛門と同じく名主を務め、村の運営にリーダーシップを発揮し人々に賞賛されました。

天保年間(1831-1844)の初め頃に名主を辞めて医師を志し、江戸に出て当時最高の洋学者であった宇田川榕菴の弟子となり、3年間医学を学びました。天保5年(1834)頃には帰郷し医者として開業しました。蘭齋の新しい医術による治療は評判を呼び、治療を希望する人々が多数訪れました。

また、高い学識を評価され、請われて私塾を開き、こちらも評判を呼んで門弟の数は500人に上りました。門弟の中で一番の俊才が堀口藍園です。

蘭齋は書をよくし、慎重な筆法で楷書・行書とも得意で、和歌や漢詩を書いたものが市内各所に残されています。

明治15年(1882)、蘭齋は84年の生涯を閉じ遍照寺の墓地に葬られました。墓は渋川市の指定史跡となっています。藍園ら門弟の発起による顕彰碑「蘭齋高橋翁碑」が花缺地蔵(入沢)境内に現存します。



蘭齋高橋翁碑 (花缺地蔵境内)

高橋蘭齋の略年表

西暦	和暦	年齢	できごと
1799	寛政 11	1	農業のかたわら馬宿を営む高橋茂右衛門の二男として裏宿に生まれる
1806	文化 3	8	木暮足翁に弟子入りし読み書きから和歌を学ぶ
1812	文化 9	14	足翁妹・登茂の婿となっていた蘭齋の兄・幾太郎が足翁から家督を譲られる
1821	文政 4	23	渋川に訪れた近江国(現・滋賀県)出身の大寂庵立綱から和歌を学ぶ
1822	文政 5	24	名主だった祖父・義右衛門の代理を父・富太郎が務める
			このころ 祖父と父をあいっいで亡くし茂右衛門を襲名。若くして名主となる
1829	文政 12	31	堀口藍園(12歳)が蘭齋に弟子入りし読み書きの初歩から備学までを習う。藍園は人一倍の勉強家で蘭齋門下の俊才と言われた。蘭齋はこの頃には私塾を開いていたと思われる
1830	文政 13	32	足翁が医者となることを志し紀伊国和歌山にあった華園青洲の春林軒に入門する
			このころ 十数年務めた名主を辞め医師になることを志し江戸へ行く有名な学者たちを訪問しその中から宇田川榕菴に弟子入りし医学を学ぶ
			この間、兄・与左衛門(幾太郎)の長男・道太郎を養子として家業をまかせていた模様
			3年間医学を学んだ後 渋川に帰り医者として開業する
1843	天保 14	45	医業開業願を岩倉代官所に提出する
1862	文久 2	64	足翁亡くなる。蘭齋は足翁をしのんで和歌を詠んだ「教え子と人のなげきの数々を負いて越ゆるん黄泉平坂」
1864	文久 4 元治元	66	足翁三回忌に和歌を詠む「巡りあえる三年の秋のけふの日は露にも法は忘れざりけり」
1868	慶応 4 明治元	70	足翁七回忌に和歌を詠む「七年の回りも猶も秋の色におもひ出にけり袖もしくれて」
1874	明治 7	76	足翁十三回忌に和歌を詠む「過いにしおもひ出て十餘り三年のけふに逢心地せり」
1882	明治 15	84	3月23日 高橋蘭齋亡くなり遍照寺墓地に葬られる
1885	明治 18	-	渋川八幡宮西の伊香保道三叉路に藍園ほか門弟等の発起により「蘭齋高橋翁碑」が建てられる。文章と文字は藍園の手による
1961	昭和 36	-	「蘭齋高橋翁碑」が渋川市渋川(入沢)の花缺地蔵の境内に移転される
1982	昭和 57	-	5月15日 遍照寺墓地にある高橋蘭齋の墓が渋川市の指定史跡となる

○年齢は数え年です ○年代は前後することがあります

高橋蘭齋の医学の師 宇田川榕菴



【写真 宇田川榕菴の著書『植学啓原』(左)と『舍密開宗』(右) 国立国会図書館デジタルコレクション】

医者を志し江戸の町へ出た高橋蘭齋は、津山藩(現・岡山県北部)の江戸詰の藩医である宇田川榕菴※に弟子入りしました。榕菴の養父・宇田川玄真は江戸蘭学界のリーダー的存在で、才能を見込まれてその養子となった榕菴も「日本近代科学の生みの親」とよばれる大学者です。

当時の日本には薬になる植物を扱う「本草学」はありましたが、植物全てを研究するような学問はありませんでした。榕菴は西洋の「植物学」を、文政5年(1822)の『菩多尼訶経』や天保5年(1834)の『植学啓原』の出版をとおして日本に初めて紹介しました。現在でも使用される「花粉」や「繊維」などの用語は榕菴がオランダ語を翻訳したときに作った言葉です。

化学の分野では、「近代科学の父」と言われるフランス人ラヴォアジエの学説を紹介したオランダ語の書を翻訳し、『舍密開宗』※として天保8年(1837)から順次出版していきました。「酸素」「窒素」「炭素」「水素」などの元素名や「酸化」「還元」といった化学反応を表す言葉も、この時に榕菴が作った言葉です。

このような大学者・宇田川榕菴に学んだ蘭齋の医学は、非常に先進的なものだったと思われます。

※宇田川榕菴 寛政10年～弘化3年(1798-1846) 大垣藩(現・岐阜県大垣市周辺)の江戸の詰藩医であった江沢養樹の長男 名門・宇田川家の養子となり数々の研究・出版で日本近代科学の礎を築いた

※舍密開宗 「舍密」とはオランダ語で化学を意味する「chemie」(英語で言うところのchemistry)に当て字をしたもの 「舍密開宗」で化学入門の意味

○主な参考・引用文献 津山市洋学資料館ホームページ『洋学博覧漫筆』

蘭齋と合作掛け軸

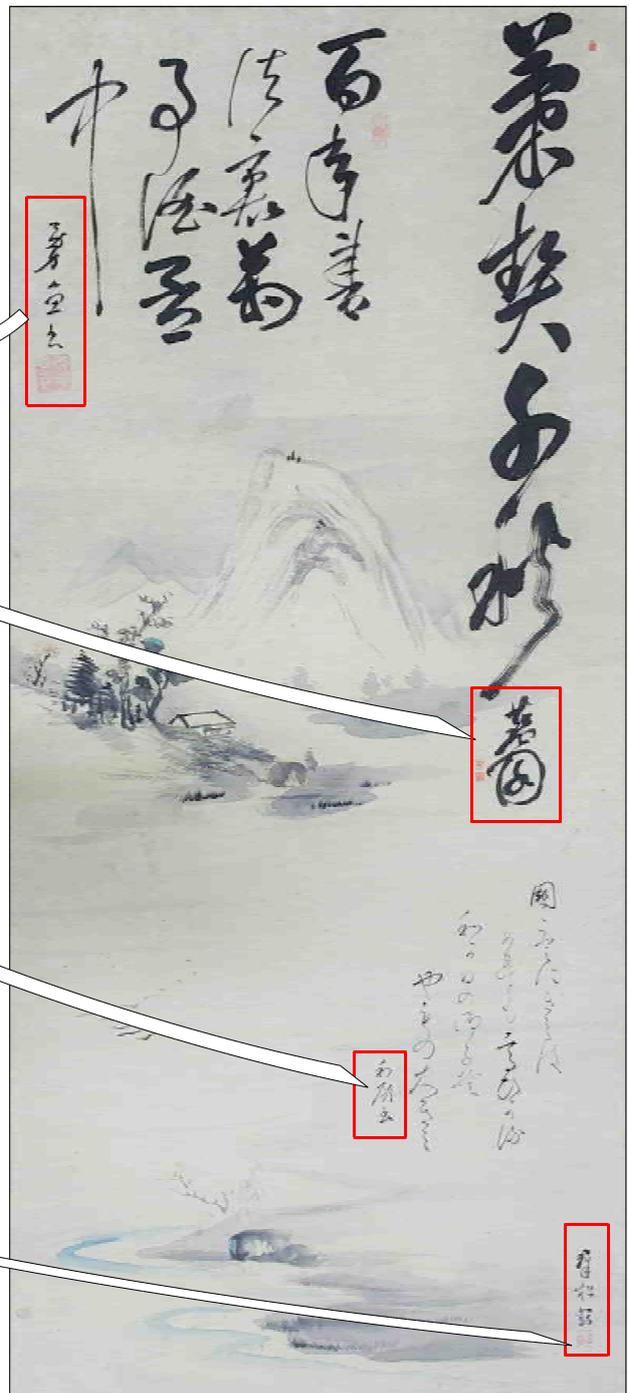
こちらの掛け軸は複数の人物が合作した作品です。おもに渋川郷学に関わる人物たちによって作成されたものと思われま

す。左上の書は、高橋蘭齋の諱（本来の名前）「勇魚」の署名から、蘭齋のものだと分かります。「百年書法裏万事酒客中」と書かれているよう

です。右端の書は、署名から堀口藍園のものと思われます。「菊契千形」と書かれているよう

です。下段にある書は、署名から狩野利房かのうとしふさの手によるものだと分かります。書いてあるのは「国寒にきみは めれとも高ひかる 和か日の明る歟 やもの大きみ」と読む和歌ではないかと推測されま

す。最下段右の署名は、この絵を描いた人物のものだと思われ、「羣松」という名前であることまでしか分かりませんでした。「羣」は「群」の異体字です。中央に描かれているのは水沢山のように見えます。



合作掛け軸 『明治二年正月勇魚藍園利房羣松合作』明治2年 個人所蔵

書かれたのが明治2年(1869)なので、蘭齋が71歳、19歳年下の藍園が52歳、更に19歳年下の利房が33歳の時の作品です。このことから、渋川郷学に連なる人々が、年齢の差を超えた交流を持っていたことがうかがえます。

○主な参考文献 渋川市市誌編さん委員会(1993)『渋川市誌第2巻』渋川市/上毛新聞社編(1982)「群馬県人名大事典」上毛新聞社

蘭齋の和歌

高橋蘭齋は折に触れて和歌を詠む人物でした。こちらでは、文化財保護課所蔵『蘭齋高橋健治先生之著 和歌集 巻一・巻二』の写本から、交友関係にまつわる和歌を紹介します。

※「」の中が引用部分です。

※生涯学習課で独自にふりがなを振り、一部文字を改めました。

○木暮足翁が亡くなった時に詠んだ歌

「木暮老師の身まかりし時

教子とひとのなげきの数々を負てこゆらん黄泉の平坂」

○堀口藍園(張卿)から菊の和え物を贈られた際に詠んだ歌

「張卿ぬしの菊のあえものをたまわりて

色も香もたまわる事ぞ薄からぬ齡を延ぶときくのあえもの」

○堀口文平(藍園の息子)が岩鼻県から帰ってきた時に詠んだ歌

「堀口文平君の岩鼻県より帰御せられけるを

あまた魚底迄もなしに濁しけん君がこころの廣澤の池」

※岩鼻県 文平が勤めていた県 渋川村を含む上野国・武蔵国の幕府・旗本領等を統治するため慶応四年(1868)に設置された

○岩附屋婚姻のお祝いに詠んだ歌

「岩附屋の婚姻を祝いて

渋川に利根をむかへて岩附の尽きぬ齡を契りこそせめ」

○堀口吉右衛門の女の子のお祝いに詠んだ歌

「堀口吉右衛門ぬしの女子の祝いに

諸共に真かねのかたき契には幾世かきらぬ齡こめなん」

○狩野利房(嘉三郎)の結婚のお祝いに詠んだ歌

「湯上なる狩野嘉三郎ぬしの妻といし

若草の妻をむかえて御吉野に八千代春する契せよ君」

○黒船来航に関して

「夷国船のまた来るかとりどりのさわぎに

神風の舟くつ返す古も夢の上とはなりにける哉」

○安政5年(1858)に始まったコレラ流行について

「安政五年の秋冷徹あきこれら疫にて人あまた死なれたるをいたみて
白露を何かかなしとおもいけん人の命の消まさる秋」

○安政7年(1860)3月24日の桜田門外の変について

「大江戸桜田の騒ぎと聞て
雪なから弥生の三日をさくら田に敷ても花の名に匂うなり」

○文久元年(1861)2月に起きたロシア軍艦の対馬占領を聞いて

「対州たいしゅう(対馬ろしあ)の魯西亞いじんあだの夷人仇せしと聞て
えみしらが仇すを見つつ忍ぶにも対馬もおなじみくに皇国ならずや」

○慶応2年12月25日の孝明天皇崩御を同月29日の夜に伝え聞いて

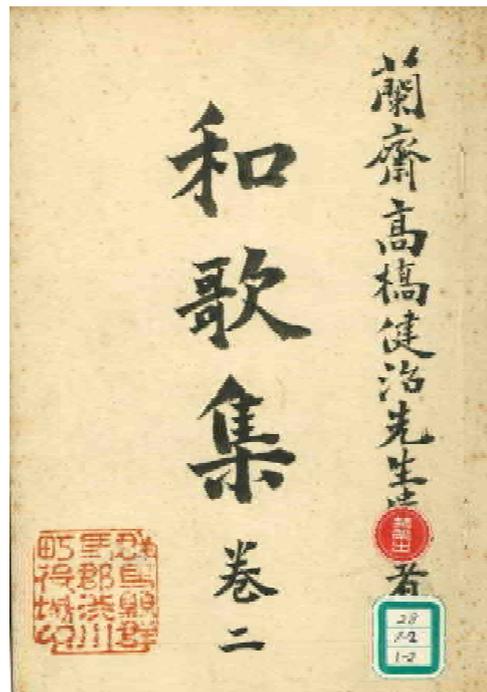
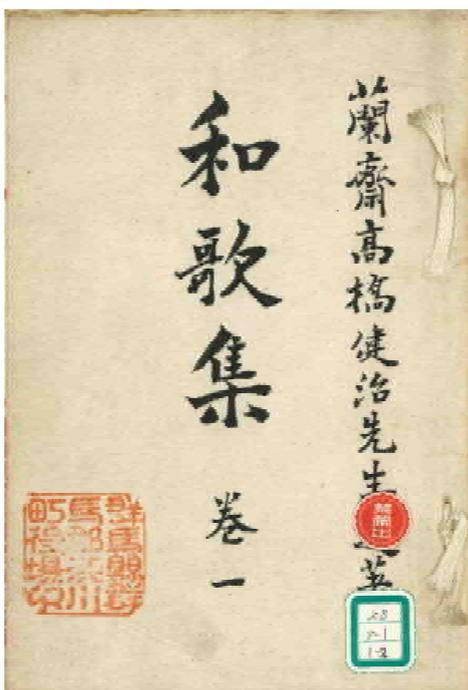
「慶応二寅年冬師走きんじょうこうていべいかの二十九日夜かみさとなん
今上皇帝陛下の神去りたま給えりと伝え聞侍りて
九重の霞は民の軒こめて大内山は春しらさらん」
※大内山 皇居のこと

○明治6年(1873)の渋川小学校開校にあたって

「明治6年8月28日きみぎみ学校興立
今日よりは君々どちの案内にて学の道も広く開けん」

○主な参考・引用文献

高橋蘭齋(年代不明)『蘭齋高橋健治先生之著和歌集 卷一・卷二 写本』/渋川市市誌編さん委員会(1993)『渋川市誌第2巻』渋川市/高橋周楨(1893)『近世上毛偉人伝』成功堂



【写真『蘭齋高橋健治先生之著 和歌集 卷一・卷二』文化財保護課所蔵】